博士論文（要約）

論文題目　　馬琴読本の研究

氏　　名　　洪　晟準

馬琴読本の研究

目次

凡例 ---------- ii

序論 ----------1

第一章　前期史伝物読本の人物造型

第一節　『椿説弓張月』と崇徳院怨霊譚 ----------7

—為朝像の造型に関わる点に注目して—

第二節　『俊寛僧都嶋物語』の俊寛像と亀王像 ----------20

第三節　『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の構造 ----------36

—唐糸の物語を中心に—

第二章　馬琴読本の創作方法

第一節　『月氷奇縁』の創作方法 ----------52

—馬琴自評を手掛かりに—

第二節　史伝物読本における史実と虚構 ----------70

—馬琴の演義体について—

第三節　『椿説弓張月』における中国文献の受容 ----------84

第四節　稗史七法則「省筆」における「偸聞」 ----------100

第三章　馬琴の理念

第一節　『石言遺響』に見える勧懲観 ----------115

第二節　馬琴読本の死の場面と仁義八行 ----------130

—『俊寛僧都嶋物語』と『頼豪阿闍梨怪鼠伝』を中心に—

第三節　馬琴読本における「懲悪」の理念 ----------146

結論 ----------163

初出一覧 ----------167

本博士論文は、すでに出版されているため、全文公表することができません。
以下に、著作の書誌事項を記載しておきます。

⑴著者名
洪　晟準

⑵題名
『曲亭馬琴の読本の研究』

⑶出版社
若草書房

⑷出版年
2019 年

⑸ISBN
9784904271216

参考文献一覧

『燕石雑志』（早稲田大学中央図書館所蔵）
『苅萱後伝玉櫛笥』（早稲田大学中央図書館所蔵）
『月氷奇縁』（早稲田大学中央図書館所蔵）
『俊寛僧都嶋物語』（早稲田大学中央図書館所蔵）
『新編鎌倉志』（早稲田大学中央図書館所蔵）
『椿説弓張月』（国立国会図書館所蔵）
『椿説弓張月』（早稲田大学中央図書館所蔵）
『浪速秤華兄芬輪』（東京大学国文学研究室所蔵）
『南総里見八犬伝』（東京大学総合図書館所蔵）
『俳諧歳時記』秋之部（架蔵本）
『姫小松子日の遊』（早稲田大学演劇博物館所蔵）
『孟子』（東京大学総合図書館所蔵）
『頼豪阿闍梨怪鼠伝』（早稲田大学中央図書館所蔵）
『和漢三才図会』（東京大学総合図書館所蔵）

麻原美子・北原保雄校注『舞の本』（新日本古典文学大系 59、岩波書店、1994 年）
麻生磯次『江戸文学と中国文学』（三省堂、1946 年）
麻生磯次『滝沢馬琴』（吉川弘文館、1959 年）
石上敏校訂『森島中良集』（叢書江戸文庫 32、国書刊行会、1994 年）
今井弘済校訂『参考保元物語』（国書刊行会、1914 年）
大島建彦校注・訳『御伽草子集』（日本古典文学全集 36、小学館、1974 年）
岡見正雄校注『義経記』（日本古典文学大系 37、岩波書店、1959 年）
神谷勝広・川元ひとみ・若木太一校訂『西沢一風集』（叢書江戸文庫 46、国書刊行会、2000 年）
神谷勝広・早川由美編『馬琴の自作批評―石水博物館蔵『著作堂旧作略自評摘要』―』（汲古書院、2013 年）
木村三四吾編『近世物之本江戸作者部類』（八木書店、1988 年）

義太夫節正本刊行会編『鬼一法眼三略巻』（義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集成 9、義太夫節正本刊行会、2007 年）
後藤丹治校注『椿説弓張月』上（日本古典文学大系 60、岩波書店、1958 年）
後藤丹治校注『椿説弓張月』下（日本古典文学大系 61、岩波書店、1962 年）
齋木一馬・岡山泰四・相良亨校注『葉隠』（日本思想大系 26、岩波書店、1974 年）
重友毅校注『近松浄瑠璃集』下（日本古典文学大系 50、岩波書店、1959 年）
鈴木重三・徳田武編『月氷奇縁・石言遺響』（馬琴中編読本集成第 1 巻、汲古書院、1995 年）
鈴木重三・徳田武編『頼豪阿闍梨怪鼠伝』（馬琴中編読本集成第 9 巻、汲古書院、1999 年）
鈴木重三・徳田武編『夢想兵衛胡蝶物語』（馬琴中編読本集成第 12 巻、汲古書院、2002 年）
高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注『平家物語』上（日本古典文学大系 32、岩波書店、1959 年）
暉峻康隆『江戸文学辞典』（冨山房、1940 年）
徳田武・横山邦治校注『曲亭伝奇花釵児』（新日本古典文学大系 80、岩波書店、1992 年）
徳田武校注『近世説美少年録』3（新編日本古典文学全集 85、小学館、2001 年）
中村幸彦校注『上田秋成集』（日本古典文学大系 56、岩波書店、1959 年）
長澤規矩也編『漢書』（和刻本正史、汲古書院、1972 年）
松尾葦江校注『源平盛衰記』2（中世の文学〈第 1 期〉、三弥井書店、1993 年）
松村明監修『大辞泉』（小学館、1995 年）
向井芳樹『近松の方法』（桜楓社、1976 年）
横道萬里雄・表章校注『謡曲集』下（日本古典文学大系 41、岩波書店、1963 年）
横山邦治編『為永春水編〈増補〉外題鑑』（和泉書院影印叢刊 49、和泉書院、1985 年）
吉田賢抗著『論語』（新釈漢文大系 1、明治書院、1976 年）
龍肅訳註『吾妻鏡』1（岩波書店、1939 年）
『羇旅漫録』（日本随筆大成〈第 1 期〉1、吉川弘文館、1975 年）
『参考保元物語』（国書刊行会、1914 年）

『史記』8（新釈漢文大系 88、明治書院、1990 年）
『浄瑠璃集』（新編日本古典文学全集 77、小学館、2002 年）
『近松浄瑠璃集』下（新日本古典文学大系 92、岩波書店、1995 年）
『烹雑の記』（日本随筆大成〈第 1 期〉21、吉川弘文館、1976 年）
『馬琴評答集』（天理図書館善本叢書和書之部第 12 巻、八木書店、1973 年）

麻生磯次「隠微」（『国語と国文学』第 14 巻第 7 号、1937 年 7 月）
麻生磯次「稗史小説の法則―八犬伝の強調的技法に就いて」（『国語国文』第 8 巻第 2 号、1938 年 2 月）
石川秀巳「『椿説弓張月』試論―『保元物語』と虚構の方法―」（『日本文芸論叢』1、1982 年 3 月）
石川秀巳「『頼豪阿闍梨怪鼠伝』論序説―稗史的世界の基底―」（『山形短期大学紀要』第 18 集、1986 年 3 月）
石川秀巳「『頼豪阿闍梨怪鼠伝』論―稗史的世界の構造―」（『読本研究』初輯、1987 年 4 月）
石川秀巳「『朝夷巡嶋記』私考―史実・伝承・稗史―」（『読本研究』第 2 輯上套、1988 年 6 月）
石川秀巳「『俊寛僧都嶋物語』論序説」（「国際文化研究科論集」第 3 号、東北大学大学院国際文化研究科、1995 年 12 月）
石川秀巳「『俊寛僧都嶋物語』論」（「国際文化研究科論集」第 6 号、東北大学大学院国際文化研究科、1998 年 12 月）
板坂則子「「稗史七則」発表を巡って」（『国語と国文学』第 55 巻第 11 号、1978 年 11 月）
大高洋司「『椿説弓張月』論―構想と考証―」（『読本研究』6 輯上套、1992 年 9 月）
大高洋司「『月氷奇縁』の成立」（『近世文藝』第 25・26 号、1976 年 8 月）
大高洋司「文化五、六年の馬琴読本」（『読本研究』第 5 輯上套、1991 年 9 月）
大高洋司「『石言遺響』論」（『国語と国文学』第 55 巻第 11 号、1978 年）
北川博子「『月氷奇縁』の画工」（『近世文藝』第 96 号、2012 年 7 月）
後藤丹治「読本三種考證―桜姫全伝・月氷奇縁・阿古義物語―」（『国語国文』第 8 巻

第 4 号、京都大学国文学会、1938 年 4 月）
重友毅「馬琴の隠微について」（『国語と国文学』第 5 巻第 2 号、1928 年 2 月）
諏訪春雄「俊寛」（『平家女護島―俊寛―』国立劇場上演資料集 263、1987 年 6 月）
徳田武「『椿説弓張月』と『狄青演義』」（『国語と国文学』第 55 巻第 11 号、1978 年 11 月）
徳田武「読本と中国小説」（『近世近代小説と中国白話文学』汲古書院、2004 年）
中村幸彦「滝沢馬琴の小説観」（『近世小説』第 6 巻、1963 年 10 月）
中村幸彦「椿説弓張月の史的位置」（『中村幸彦著述集』5、中央公論社、1982 年）
服部仁「馬琴の〈隠微〉という理念」（『近世文藝』第 25・26 巻、1976 年 8 月）
浜田啓介「馬琴の所謂稗史七法則について」（『国語国文』第 28 巻第 8 号、1959 年 8 月）
浜田啓介「「勧善懲悪」補紙」（『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、1993 年）
播本眞一「『南総里見八犬伝』と『孟子』」（『八犬伝・馬琴研究』新典社、2010 年）
廣岡志津子「俊寛説話研究―平家物語及び近世文学における―」（「東京女子大学日本文学」第 33 号、1969 年 10 月）
藤村作「馬琴研究」（『日本文学講座』第 10 巻、新潮社、1931 年）
前田愛「『八犬伝』の世界」（『文学』第 37 巻第 12 号、1969 年 12 月、岩波書店）
水野稔「馬琴文学の形成」（『文学』第 36 巻第 3 号、1968 年 3 月）
依田学海「椿説弓張月細評」（『四大奇書』上巻、帝国文庫 39、1896 年）

論文の内容の要旨

本論文では、馬琴読本において、人物造型がどのようになされたのか、どのような創作方法が用いられたのか、馬琴はどのような勧善懲悪の理念を持っていたのかといった問題について、馬琴の特徴である、作中の人物や出来事などに文献上の根拠があるということを必ず示す態度、倫理的整合性に適った勧善懲悪を描く態度に注目して考察を行った。その際、馬琴の自作批評集『著作堂旧作略自評摘要』（天保十五年成立）を手掛かりとして利用し、作品執筆時の見解と天保十五年当時の見解がどのように相違しているかも視野に入れて分析した。

第一章「前期史伝物読本の人物造型」は、『椿説弓張月』の為朝、『俊寛僧都嶋物語』の俊寛と亀王、『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の唐糸を対象として、各人物がどのように造型されているかを考察したものである。

第一節「『椿説弓張月』と崇徳院怨霊譚―為朝像の造型に関わる点に注目して―」では、『保元物語』と『雨月物語』との比較を通じて、『弓張月』において崇徳院の悪人としてのイメージが強調されていることを検討した。また、その一方で崇徳院が金比羅大権現と同一視されており、崇徳院には善と悪の二重のイメージが与えられていることを説明した。そして、崇徳院の二重のイメージが為朝に受け継がれ、為朝にも義人と朝敵という二重のイメージが形成されたことを指摘した。

第二節「『俊寛僧都嶋物語』の俊寛像と亀王像」では、俊寛と亀王の人物造型について考察した。「足摺」という悲劇的な場面の省略を通して、同情を誘う俊寛像から武人的な俊寛像へと変更が可能になったことを指摘した。また、悪人的要素を持つ亀王は完全な罪の精算が適わないのであるが、大団円に至って身替りという方法によって罪が精算されたことを検討した。以上を通して、俊寛は鬼一法眼と、亀王は白河の湛海と、それぞれイメージが重ねられていることを指摘した。

第三節「『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の構造―唐糸の物語を中心に―」では、本作品を構成する二つの敵討ち物語の他に、唐糸を中心とする第三の敵討ち物語も見出せることを指摘した。また、唐糸の人物像において、先行作品とは異なる造型がなされていることについて検討し、本作品の唐糸は格段と強い存在として描かれていることを説明した。このように、本作品を義高や頼豪阿闍梨ではなく唐糸を中心に読むことで、義高の孝と忠

が中心であった物語が唐糸の忠と貞の側面も持っていることを指摘した。

第二章「馬琴読本の創作方法」は、馬琴が読本創作をする際にどのような点を重視していたかを究明することを目的とし、稗史七法則や演劇的要素の利用、「新奇」な脚色、中国文献の利用、史実と虚構の巧みな利用といった、読本創作上の特徴を明らかにしたものである。

第一節「『月氷奇縁』の創作方法―馬琴自評を手掛かりに―」では、『著作堂旧作略自評摘要』において馬琴が最も高く評価している『月氷奇縁』の作品と自評の比較分析を通して、本作品が高評価を得た要因が、次の二点にあることを明らかにした。第一は、稗史七法則のうち、省筆、伏線、照応、反対の四つを物語の展開に巧みに利用した点、第二は、歌舞伎・浄瑠璃から趣向を取り入れた箇所や登場人物の再会の場面に「新奇」な脚色がなされている点である。

第二節「『椿説弓張月』における中国文献の受容」では、馬琴が『弓張月』執筆時にどのような中国文献を利用していたかを検討した。また、『弓張月』の本文や章段名に見える『韓非子』が、為朝に対して極めて厳しい態度をとる信西像の形成に大きな影響を与えていることを指摘した。

第三節「史伝物読本における史実と虚構―馬琴の演義体について―」では、まず、前期史伝物読本三作品における主人公等に、それぞれ生存説が存在することや、彼等の生存を可能にするために馬琴の加えた虚構に必ず根拠があることを検討した。また、馬琴の演義体は、歴史上の人物や出来事を正史のまま取り入れ、その上、虚構を施すところに特徴があり、そうすることで、物語は「虚実相半」する内容となり、その娯楽性が一層高まったということを明らかにした。

第四節「稗史七法則「省筆」における「偸聞」」では、稗史七法則「省筆」の二つの手法のうち、「偸聞（立ち聞き）」が物語の中でどのように表現されているのかを、具体的な用例を通して分析した。また、二人以上の人物による二重の「偸聞」の場面が設けられていること、地の文と挿絵の配置によって作品が面白さを増していることを指摘した。その結果、この稗史七法則「省筆」は、物語の簡略化と複雑化を同時に具現した小説技法の一つであると位置づけた。

第三章「馬琴の理念」は、馬琴読本において馬琴の勧懲観がどのように表れているか、また彼の考えていた正しい勧善懲悪とはどういうものなのかについて、主に「懲悪」の

視点から考察したものである。

第一節「『石言遺響』に見える勧懲観」では、作品において勧善懲悪に矛盾していると思われる箇所を取り上げ、『著作堂旧作略自評摘要』の記述を手掛かりに分析を行い、馬琴の勧懲観から見るとこの箇所は正しいことを確認した。勧善懲悪に食い違いが生じる要因として、①先行作品を取り入れるためのやむを得ない設定、②親から子へと受け継がれる善悪、の二点を挙げることができた。また、本作品の執筆時期において、馬琴は「勧善」よりも「懲悪」を重視していたことを指摘した。

第二節「馬琴読本の死の場面と仁義八行―『俊寛僧都嶋物語』と『頼豪阿闍梨怪鼠伝』を中心に―」では、まず、「仁義八行」という用語と八つの徳目について、馬琴作品の用例を通して具体的に検討し、馬琴が『夢想兵衛胡蝶物語』で「八行」という表現を初めて使ったことを指摘した。次に、『俊寛僧都嶋物語』と『頼豪阿闍梨怪鼠伝』における脇役の死の場面で強調されている仁義八行を通して、物語の因果関係の中心にこの八徳目があることを明らかにした。

第三節「馬琴読本における「懲悪」の理念」では、『弓張月』の阿公と『八犬伝』の船虫が、それぞれの作品で極悪人として描かれていることを具体的に分析し、この両者が強烈な悪人として描かれている理由が、「懲悪」を強調するためであることを指摘した。また、馬琴は善人より悪人の描写に力を入れる傾向を持つが、これは悪と対照関係に置かれる善が用意されているからで、馬琴作品において「懲悪」を強く描くことによって、それに対照する「勧善」も強調されるようになることを明らかにした。

以上の考察を通じて、馬琴の読本創作における特徴を見出し、本論文では次の二点を達成したと考える。第一は、人物造型において、人物の善悪関係は受け継がれていくものとして設定される場合があり、そこに仁義八行の徳目が関わってくる場合もあるという点、第二は、仁義八行の徳目が人物の行動や運命を規定しており、また物語において「勧善」より「懲悪」の方が強調されて表れているという点である。